

『背影』に流す涙

裴 崢

親子や家族の力は、次第に軽くなっているようだ。親が偉いから子も偉いという時代は過ぎた。これからは親子や家族の絆だけでやっていけるはずもない。しかし、親は、子供に自分の生き方をしっかりと認めさせたい。時代がどうなろうと、親は子に自分の後ろ姿を見てほしいのだ。こうした親と子の真情に触れる時、私は『背影』という作品への思いを新たにしないわけにはいかない。

中国の作家朱自清が、1925年¹⁾に発表した『背影』は、南京の浦口駅で彼が8年前に父親と別れた際の出来事をまとめている。

当時、「私」は北京の大学で勉強していた。揚州にいた祖母が亡くなり、「私」は徐州にいた父と一緒に揚州へ行き、祖母の葬儀を営んだ。葬儀が終わってから、失業していた父は仕事を探しに、「私」と共に南京へ出た。南京に一泊してから、さらに北上する「私」を父は駅まで見送りに来た。一人北京に帰る「私」のことを心配して、迷った末に、見送りに来たのだ。

父は荷物を見守ったり、荷物を運ぶ人のチップを値切ったりした。息子の「私」はそんな父が不満で、途中気をつけるようにと心配してくれる父に「余計なことを」と気に入らない。

父は蜜柑を買うために、線路を隔てた向こうのホームまで出掛けた。でっぷりとした体に、黒い長袖服と紺の綿入れを着た父は、よろよろといったん

¹⁾ 『『背影』は1927年10月に発表されたのだ』という説もあるが（張玉新「《背影》究竟写于哪一年」、『語文教学通訊』、語文報社、1993年12月、41ページ参照）、ここでは「伝統的説法」に従うことにした。

線路に下り、また向こうのホームに這い上がる。この「背影(後ろ姿)」を見た時、「私」の涙は早くも流れてきた。

父は蜜柑を「私」に届けてから、たいしたことではなかったように服の埃を払い、列車から降りていった。父の「背影」がひとつみに消え、見えなくなった時、「私」の涙はまた出た。

それから8年経ち、息子はこの出来事を思い出している。ここ2年間は父に会っていない。父は手紙で、世を去るのはもう遠くないと書いて来ている。父の手紙をそこまで読むと、「私」には、でっぶりした体に、紺の綿入れと黒い長服を着た父の「背影」がまた涙に霞んで見えてきた。今度、父に会えるのはいつなのだろうか。

このような話である。

息子を見送り、息子に蜜柑を買ってくれた父への思い。これは何も特別な話ではないが、「背影」には、父と子の心のありようがきめこまかに描かれており、深い感動と豊かなイメージを読み手に与えてくれる。

この作品は、中国では民国時代の1930年代から葉聖陶の編集した『国文百八課』、『初中国文課文』、『開明国文講義』などの教材として使用されていた。しかし50年代には、ここに描かれる父子愛は、当時宣伝されていた愛国主義とは大きくかけ離れ、思想的内容が弱い、消極的で暗く格調が低い、と指摘され、教材から姿を消したそうだ。私は中学校時代、朱自清の『春』という作品を習い、この作品は学べなかった。文化大革命後には『背影』は再び教材として使用されている。教材として、今はどのように扱われているかを検討したい。

1 教材としての『背影』

人民教育出版社語文一室編、1991年出版の初級中学課本『語文』第四冊では、作品のストーリーと「作者の用意(作者の真意)」を明らかにさせるため、次のような設問をしている。

祖母の葬儀に触れる最初の部分はどんな役割を果たしているのか。南京滞在中の父子の見聞に一言も触れないのはなぜか。息子を見送り、息子に蜜柑を買った父をどう理解すればよいのか。

父の正面の表情ではなく、4回も使われた父の「背影」や駅頭で別れた父の言葉に注目させて、この作品の描写を理解させようとしている。

同出版社が93年に出版した九年義務教育三年制初級中学課本『語文』第一冊では、91年版と同じ、父の「背影」描写や父の言葉のほか、父子の真摯な感情の底に、淡々とした哀愁が流れている描写に注目している。また題名に関しては、『浦口別父』、『回憶我的父親』などと比較した上で、『背影』という題名の適切さとユニークさを味わわせている。

北京師範大学附属実験中学、北京市教育局教学研究部編著、95年出版の九年義務教育三年制初級中学課本『語文』第二冊では、この作品の「感情」と「中心意思」を理解し、作品の内容と題名『背影』とがどう呼応し、どう描写されているのかを分析することに重点を置いている。そのために、父に関する「背影」と言葉の描写の他に、「私」の心理に関する描写にも注目させる。父の「背影」を見て、「我的眼泪很快地流下来了(私の涙は早くも流れてきた)」のはなぜか。父が「私」のために何かと心を砕く姿に触れた時、「我那时真是聪明过分(私はあの頃は本当に賢さが過ぎた)」、「那时真是太聪明了(その時本当に余りにも賢すぎた)」とくりかえし表現しているのはなぜなのか、を考えさせている。

教材の扱い方は、年を追う毎に改善されていると思う。「私」が実家に戻り、父と共に祖母の葬儀を営む部分の役割は何か、というような膨らみのない91年版での設問は、その後の教科書ではなくなっている。この作品に描かれた重苦しく、悲しい状況を理解するためには、「なぜ？」とそのままの形で疑問を投げるのではなく、「不禁簌簌地流下眼泪(思わず涙を流した)」、あるいは父が言った言葉「事已如此，不必难过，好在天无绝人之路(こうなった以上、余り悲しむな。この世に絶望することなどないのだ)！」などの表現を考えさ

せている。95年版の教科書は、反語として使っている「聪明」という言葉の意味を分析するための設問も行っている。「課堂教材研究所中学語文課程教材研究開発中心編者」によって、昨年5月に出版された『課堂教学設計与案例』では、教師が文章を音楽に併せて朗読し、クラスを少人数のグループに分けて、重要な語句や表現を見つけ、互いの受止め方を自由に交流させ、また父の服装に関する細かい描写を取上げ、その効果を考えさせ、さらに作品の題名、たとえば「父愛」に書き直してからの違いを比較させて、表現や文章そのものを享受し、体感させるような実践授業を紹介している²⁾。

しかし、残念なのはどの教科書も作品の理解を作者の創作意図などと結び付けていることだ。95年版の教科書には、「どういう表現が作者の家庭状況を表しているのか」という設問がある。ここで「作者」を突然持ち出す必要はない。作者はこの作品では「私」として表現されているのだから、「私」の「家庭状況」と表現すればよいからだ。この作品は散文として、作者自身の体験が書かれているので、「私」=作者ではあるけれど、作品として読む時は、作者と離れて「私」の感情を味わう方がよいはずだ。

こうした教科書での扱い方を参考にしつつ、作品の構造とその優れた表現を、私なりに分析してみたい。

2 作品の構造と分析

朱自清は北京清華大学で教鞭を取っていた1925年に、北京大学で勉強していた'18年(20歳)の頃を回想して『背影』を書いた。『朱自清文集』に収録されている。当時、作者の父は徐州で働き、祖母は揚州にいた。作者は北京から揚州に行くのに、徐州と南京を經由しなければならなかった。

²⁾ 課堂教材研究所中学語文課程教材研究開発中心編者『課堂教学設計与案例 教案 8年級 語文 上冊』(人民教育出版社 延辺教育出版社)2007年5月, 31-33ページ。

作品のストーリーは平易だが、鮮やかな表現の内に、伏線が散りばめられ、場面は次々と展開していく。葉聖陶が次のように評価している³⁾。

这篇文章通体干净，没有多余的字眼，即使一个“的”字，一个“了”字，也是必须用才用。多读几遍，自然有数。如果读得合乎自然语调，人家听了一定很满足很愉快，因为他听见了一番最精粹的说话（この文章はすべて無駄なく、余計な字句がない。“的”という一字，“了”という一字でさえ、必要な時にしか使っていない。何回も読めば、自然に分かる。極普通に読めば、聞いた人は満足し、喜ぶだろう。極めて洗練された話を聞かされたからだ）。

作者の体験をもとにした作品だが、練り上げられた文章に無駄はなく、きめ細かに完成している。

2.1 構造

この作品は、「初め」の話題提示と「終り」の話題決着とが響き合うように、呼応しながら首尾一貫して語られる。「初め」と「終り」を繋げているのが回想の部分で、南京の浦口駅での「出来事」となっている。

「私」が「もっとも忘れられない」とする父の「背影」はどんな状況での「背影」なのか。それが細かく具体的に明らかにされる。8年前の出来事——祖母の死亡、父の失業、南京での別れ——が、時間を追って展開される。何も劇的な話ではない。しかし、細密な描写と適切な展開によって、父の「背影」は鮮やかなイメージとして読み手に迫ってくる。表現は淡々としていても、父子の情愛は胸にしみる。

8年前に見た父の「背影」を思い、鮮明なイメージを、重みのある形でしっかりと描いているのだ。

『背影』は次の3つの場面に分けられる。

³⁾ 葉聖陶『文章例話』（『教師教学用書』、人民教育出版社）1994年、30ページ。

場面 1 「初め」——「背影」の提示（冒頭から「……我最不能忘記的是他的背影」まで。）

場面 2 「出来事」—— 8 年前の状況説明（「那年冬天」から「我的眼泪又来了」まで。）

祖母の死亡，父の失業

南京で 1 泊

南京での別れ 駅への見送り

蜜柑を買う「背影」

ひとごみに消える「背影」

場面 3 「終り」——「背影」の重み（「近几年来」から最終行まで。）

父が何をしたかは，時間を追って詳しく鮮明に述べられる。父の「背影」を見て，「私」が何を感じたかは，当時の気持ちと 8 年後の現在の思いとを織り混ぜて描かれる。だからこそ，父の「背影」は，「私」に様々な思いと涙をもたらすものとして，時間や場所に関係なく鮮明に表現されている。

2.2 分析

場面 1

我与父亲不相见已二年余了，我最不能忘记的是他的背影。

「私」にとって「もっとも忘れられない」のは父の「背影」だ，と作品はいきなり題名と重なる表現を冒頭で使っている。

題名の「背影」は，まず単刀直入にクローズアップされる。24 文字で表現される場面だが，読み手をぐいぐいと作品に引き込んでいく仕掛けだ。

「私」と父はもうこの 2 年余り会っていない。「不相見」で，「没相见」ではない。「不」も「没」も打ち消しだが，「不」には意志，意図が滲む。「没」は事実を表現するだけだ。「私」と父が「不相見」なのは，この数年，父も「私」も忙しかったため，会えない，あるいは会わないでいるという意味が潜んで

いる。24文字の中で、「最不能忘记」の「最も」という最上級の副詞は、「背影」という図像をひととき濃くしている。

場面2

24文字の場面が続く場面2では、南京浦口駅での父と子の別れが述べられる。父は忙しいため、駅での見送りはしないつもりだったが、かなり「躊躇」した末に、旅立つ「私」を見送ることにした。

「躊躇」はこの作品を理解するキーワードの一つだ。この「躊躇」を理解するには、「私」の家庭背景を知らなければならない。

祖母を失い、父親も仕事を失っている。家具などの殆どが質屋にゆき、葬儀の費用も借りるほどで、家族は悲しみにうちひしがれている。そんな状況の元、父は仕事を探しに南京へ行き、「私」は北京の学校に戻る。父子の別れは惨めで寂しかっただろう。

一家の大黒柱の父は、家の貧しさを誰よりもよく知っている。しかし、悲しみは隠し、一日も早く仕事を見つけ、金を稼いで、家を支えなければならない。「仕事探し」に迫られた父が、「息子の見送り」に感じた「躊躇」が、どんなものだったのか、読み手にも伝わってくる。

「仕事探し」は家族を養う急務だ。一方息子はもう二十歳を過ぎていて、北京へ行くのも初めてではない。だから、一旦はもう見送らないと心に決め、旅館のボーイに息子を駅まで送るようにと頼んだ。しかし父は、ボーイに頼むだけでは安心できなかった。ボーイでは父のように、息子を慰め、励ますことはできない。そこで、父は「躊躇了一会儿，终于决定还是自己送我去（しばらく迷ったが、やはり自分が見送ることに決めた）」。息子を見送ることは父にとって、職を求めることよりも大事だと判断したのだ。

けれども、「私」は父のこうした「躊躇」をその時素直に理解できただろうか。

「私」は見送りを何度も断った。父は、「不要紧，他们去不好（大丈夫，俺が行く）」と譲らなかつた。「私」が乗車券を買う間、父は荷物を見守った。

荷物が多いため、それを運ぶ人にチップを遣ったが、その時父は値切りもした。「私」はそんな父が不満だったのだ。

一緒に汽車に乗り込んだ父は、出入りしやすい席を見つけ、「私」に「夜寝過ぎず、冷えないように気をつけろ」と言い聞かせる。「私」は、父がなにもそんな余計なことをいわなくてもよいのに、とうんざりだった。

しかし、8年後の今、「私」は、「唉、我现在想想，那时真是太聪明了！（ああ、今考えたら、あの時の私はなんと賢すぎたことか！）」と後悔している。あの時の父を十分に理解できなかった自分を「聡明」と表現している。8年後になって、「聡明」という表現を使った「私」の今の心情はしっかりと理解しなければならぬ。父は悲しみを乗り越えて、息子にできることを尽くした。それなのに、「私」はあの時、息子を思い、愛する父のすべてを理解できたのだろうか。

「聡明」は頭がいい、理解力が優れているという意味だけではない。一を知って十を知るというように、物事の隠している意味、本質を見抜く能力も指す。ここでは「私」が父の愛情を理解できなかった愚かさを悔いる言葉になっている。「聡明」を反語として使って、自分を厳しく責めている。もし「唉、我现在想想，那时真是太愚蠢了！（なんてばかだったのだろう）」と書き換えると、原文の鮮やかな表現効果と奥深い意味合いが失われてしまう。

「私」は父に、「もう帰っていい」と言った。ところが、父は何も答えず、窓から外を見て、「我买几个橘子去，你就在此地，不要走动（蜜柑を買ってくるから、ここにいろ、動くなよ）。」と言った。

ホームに降りて、蜜柑を買いに行く父の「背影」が、「私」にその時の父をすっきり見せてくれた。小さな黒い帽子、黒い長服、紺の綿入れ、よろめく足元、――父のこうした姿を見て、「私」は父の老いと苦勞、自分への思いを知らされる。線路を横切り、ホームに這い上がる父の「背影」を見て、涙はもう止まらなかった。

「探（身を乗り出す）」、「爬（這い上がる）」、「攀（両手で攀じ登る）」、「縮（足を掛けて登る）」などの動詞によって、父が蜜柑を買う時の苦勞が伝わっ

てくる。それなのに、蜜柑を「私」に渡した父は、「扑扑衣上的泥土，心里很轻松似的（埃を払い落とし、たいしたことではなさそうだった）」。「この「轻松」については、どう理解したらよいのか。いろいろと厳しい家庭状況の中で、息子との別れは、辛かっただろう。しかし、息子に心配を掛けないように、父はわざと「轻松」そうに見せかけた。また、蜜柑を買って、父親としての役割をいくらかは果たしたと思い、ホームに這い上がった苦労も忘れて、「轻松」を感じた、と理解もできる。

実は、「私」の実家、揚州では、親しい人に蜜柑を送る習慣があるそうだ。韓雪屏はこの習慣について、次のように述べている。

买橘子是扬州特有的习俗。扬州人把“走运”说成“走局”。“局”与“橘”同音，所以亲朋好友送礼，橘子必不可少。送橘子，就是希望亲友走运。至今每逢年节，扬州的老人多给孩子买橘子吃〔蜜柑を買うことは、揚州では特有の風習だ。揚州の人は“走运”（運がいい）を“走局”と言っている。“局”は“橘”と同じ発音だ。そのため、親しい人にお土産を送る時、蜜柑は欠くことができないものだ。今になっても、お正月などの祝日になると、揚州のお年寄り子どもたちによく蜜柑を上げるのだ〕⁴⁾。

この風習からも“私”に対する父親の思いを理解することができるだろう。

父は、「我走了，到那边来信（もう帰るから、着いたら手紙を寄越せ）！」と言って、列車から降りた。二、三步歩き、振り返って「私」を見ると、「进去吧（中に入れ）」、と言った。父の「背影」はひとごみに消え、見えなくなった。「私」は席に戻ると、涙がまた出てきた。父の「背影」が「再找不着了（再び見つからなくなった）」の“再”と“找”は私のもう一度父を見たい気持ちを強く代弁する。

4) 韓雪屏「讲静态语言规则还是教动态言语经验（静態語言の規則を教えるかそれとも動態言語の経験を教えるか）」（『語文教学通讯』，語文出版社）1998年2月，62ページ。

父の「背影」と「私」の涙を説明するために、祖母の死亡と父の失業の事実はきちんと書かれている。なのに、南京での経過には一切触れていない。駅での出来事は詳しく書かれている。このため、駅での「背影」はひとときわ鮮やかになる。父の姿を読み手にはっきりと思い描かせ、父と子の飾り気のないやり取りを目の当たりにさせてくれる。

場面3

それから8年経った。ここ数年、父も「私」も忙しく、家の状況はますます悪くなっている。父は若い時から自立して出稼ぎなどもしてきたのに、惨めな老後になってしまった。生活に苦しんだ父は、このため、自分の感情を抑えきれず、家族に当たり散らしたりして、「私」への思いは以前ほどではなくなった。ここ2年ほど会えないでいるため、父は「私」と孫に気を配るだけで、「私」への手紙の中で、「大约大去之期不远矣（世を去るのもう遠くない）」と書いている。ここまで読んで、「私」には、父の「背影」がまた涙に霞んで見えてきた。

この作品では、涙が流れる場面は4回ある。1回目は徐州で仕事を失った父に会い、家の中が乱雑に散らかしていた光景を見て、祖母の死も思い出した時、2回目は蜜柑を買うためにホームに這い上がろうとする父を見た時、3回目は父と駅で別れて、父が見えなくなった時、4回目は8年後父の手紙を読んで、その「背影」を臉に描いた時。

失職した父、乱雑に散らかしていた家を見て、祖母の死も思い出して流した1回目の涙は、家族の直面している状況の辛さ、寂しさを浮き立たせた。ホームに這い上がる父の「背影」を見た時に流した2回目の涙は、息子を思う父の気持ちを知った感動によるものだ。「私」に蜜柑を買うため、年をとって太っているのに、無理をしてホームに這い上がる父の「背影」が「私」の涙を誘ったのだ。

父の「背影」がひとごみに消えた時に流した3回目の涙は、父を求める恋しさ、父と別離した侘びしさによるものだ。父にこれだけ心配させながら、

息子として何もできない「私」の不肖さや家族のためにこれからも苦勞しなければならない父への思いが涙となったのだろう。

場面3で流した涙は少し違う。父の健康を案じて、感傷する涙ばかりではなく、父の手紙を読んでいる内に、父と子の人生での切ない繋がりが、「私」に涙を溢れさせたのではないか。

読み手は、「私」のこの4回の涙を味わい、「私」が父の「背影」に抱いた思いを知り、「私」と同じ思いで父のでっぷりした体、紺の綿入れ、黒い長服の「背影」を忘れられないものにするのだ。『背影』は子に深い愛情を注いでいる父の背影とともに、そうした父の愛情に対する「私」の熱い涙を描いている。作品の理解には作者と結びつけるべきではないが、ここまで来ると、この作品を書いた作者の契機に触れざるを得なくなってしまう。作者は次のように記述している⁵⁾。

我写『背影』，就因为文中所引的父亲来信那句话。当时读了父亲的信，真是泪如泉涌。我父亲待我的许多好处，特别是『背影』里所叙述的那一回，想起来跟在眼前一般无二（私が『背影』を書いたのは，作品中に引用した父のその言葉のためだ。当時父の手紙を読んでから，本当に涙が溢れた。父の様々な優しさ，特に『背影』で書いたことは，思い出すと臉にありありと浮かんでくる）。

『背影』は，この作品誕生の契機にふさわしく，無駄のない表現で父の優しさ，父子の有りようをきめ細かく浮彫りされている。それに，読み手が感動したのはそれだけどころか。家族として生きることの愛しさ，切なさ，人間として生きることの辛さ，苦しさとその素晴らしさをも教えてくれているように思う。

この作品を，中国語を1年半勉強した日本人学生に読ませた。学生から次

⁵⁾ 「予習提示」（九年義務教育三年制初級中学課本『語文』第一冊，人民教育出版社語文一室編，人民教育出版社）1993年，19ページ。

のような感想を得られた。

物語は、祖母の死と父親の失業という、悲しい出来事が二つ重なった場面から始まり、一見そのまま悲しく、さびしいストーリーへと展開していくのかと思われました。

しかし実は、このことは2年余り会っていない私と父とを結びつける“きっかけ”になっているにすぎませんでした。この物語を通して一つのテーマになっている、ある一貫した気持ち、それは私に対する父の愛情や、過保護とまで言えるような気遣いです。そしてその対局には、親離れをしたがり、自らの判断に自信を持っている私があります。この物語のような親と子供のすれ違いは、どこの家庭でも見られることです。この物語は改めて親の気持ちを考えさせてくれるものでした。

「テーマ」という言葉を使ったが、作品の世界をまっすぐに捉えている。同じ大学生として、「私」の気持ちをより身近に感じたようだ。「こんなに（中国語の）長い文章を自分で読んだのは初めてでしたが、とても楽しいと感じたし、よい勉強になりました」とも書いている。

もう一人の学生は次のような感想を書いた。

平凡な設定の、平凡な物語だけど、父と息子のお互いを思いやる気持ちや行動の描写は、中国人でも外国人でも関係なく万人に感動を与えると思う。特に息子の、父に対する心の動きはどんな人でも経験のある事である。息子に父を愛しく思わせたものは、父の振る舞いや言葉ではなく、自分の為に頑張ってくれている時のふとした瞬間の後ろ姿だった。後ろ姿は、行動や言葉で表すよりもずっと、その人の苦労や悲しみが滲み出る。それを見る人に訴えかける力が強く、わだかまっていた気持ちも一瞬で消し去る力を持っていると思う。

いわば、この作品は親子の絆を語っているだけに止まらず、国籍や年齢などかまわず、普通の人生、生き方をも考えさせてくれる。中国貴州余慶県鐘山中学の教員、劉康の言う通りに、この平凡そうな短い作品は、何故未だに

広く読まれているのか、それは『背影』は「人为什么活着？人活着的意义是什么」という「普遍的な人生」⁶⁾を察知させてくれているのだ。

ここまで考えたが、今後も『背影』の持っている感動だけではなく、このような豊かさ、力強さもじっくりと味わっていきたい。

⁶⁾ 劉康『《背影》何以成为经典新探（《背影》は何故經典になる一考察）』（『語文教学通讯』，語文出版社）2007年9月，42ページ。